

東大寺二月堂修二会と講社

——一ノ井松明講を中心に——

饗庭早苗

〔要旨〕 東大寺二月堂では毎年三月一日から十四日まで修二会が勤修される。天平勝宝四年（七五二）以来一度も途絶えることのないこの「不退転」の法会において、中心となるのは練行衆と呼ばれる僧侶たちであり、それに法会中の世話をする三役以下の随伴諸役が加わる。一方でまた俗世界の人々も深く関わりを持っている。東大寺において「圓玄講」と呼ばれる団体であるが、彼らは修二会に必要な品々や祠堂金の奉納、或いは会中の警護といった形で法会を支えている。

本稿では「圓玄講」の一つである伊賀一ノ井松明講に着目し、松明調進行事がどのように始まり、継承されてきたのかを考察する。

そもそも一ノ井が東大寺と関わりを持つ要因としてはこの地が東大寺領であったことが考えられ、宝治三年（一二四九）の東大寺僧聖玄の「法眼聖玄田地寄進状」により明らかである。しかしそれを行事の起源とする結論には繋がない。以後室町時代まで史料上でこの行事は確認されないが、江戸時代中期成立の『二月堂修中日記』によってその姿を見ることが出来る。日記の記事と現在の活動記録を照合すると、調進の内容は変わることなく江戸期において行事が行われたことが確認される。また日記に「藤堂」という語句が散見され、一ノ井の属する藤堂藩が調進行事に関わりを持っていたことがわかる。それゆえこの行事が藤堂藩と一ノ井の村民たちの意志によって長く継承され続けていたものと思われる。

今日圓玄講の中に多くの廃講を見るとき、本稿が一ノ井松明講のアイデン

ティティの再確認に寄与できればと考えている。

なお一ノ井松明講に関して、江戸期以前の史料には「講」という記述はない。しかし現在「講」と呼ばれていること、また実態を鑑みると「講」という集団に相当することから、便宜上本稿では「講」と表現した。

〔キーワード〕 東大寺二月堂修二会・圓玄講・一ノ井松明講・二月堂修中日記・

藤堂藩

はじめに

東大寺修二会は毎年三月一日から二七日の間、二月堂で勤修される。

修二会の中心となる勤行は「練行衆」と呼ばれる僧侶が担い、三役以下の随伴諸役がこの法会を支えるが、一方でこの法会に関わる俗世界の人々の団体が存在する。これは修二会という同心円の外郭にあり一般の参拝者に近しくありながら、具体的に修二会という行事になくはない役割を果たす「講」である。講は練行衆上堂時の松明竹、達陀松明

木、藤蔓、油など法会勤修に不可欠な品や祠堂金を奉納したり、警護役を務める。東大寺ではこれらを一括して「圓玄講」と呼ぶ。

「圓玄講」の研究は修二会の一側面を説明すると思われるが、未だ詳細にはなされていない。そこで本稿では「圓玄講」の一つで、中世から現在に至るまで達陀松明の松明木を調進してきた伊賀国名張の「一ノ井松明講」に着目したい。中世の伊賀国黒田庄・新庄の研究において当講に触れる先行研究はあるが、講そのものの解明に及ぶものではない。さらに近世における当講の研究はないが、現在との継続の要因を考える上で近世の実態を説明することは不可欠である。そこで東大寺と現地に残る近世史料をもとに、一ノ井松明講が近世より現在にどのように継承されたのかについて考察する。

その前提として第一章で東大寺修二会と講の定義を行ない、第二章で現在の松明講の実態及び中世にみえる伊賀一ノ井松明講の起源を押さえておきたい。それらを踏まえた上で第三章で近世における一ノ井松明講の実態を取り上げることとする。

「圓玄講」が無ければ修二会は成り立たないと認識されているものの、時代の移り変わりによりその継続が危ぶまれるものもあり、実際廃絶した講も少なくない。講の記録や管理は東大寺二月堂のもとにあるとはいえ、広く講の実態や歴史を確認し記録しておくことが講の継続に繋がり、また万に一つも中断した講の再興に役立つのではないかとと思われる。

第一章 東大寺修二会と講

一、東大寺修二会の歴史と構成

修二会は「旧暦二月に修せられる法会」という意味で、東大寺修二会は別称「十一面悔過」とも呼ばれ、悔過法要を中心とする法会である。悔過法要とは僧侶が人類すべての過ちを担って悔過懺悔^{さんげ}し、心身清浄となった上で改めて仏菩薩の加護を祈る法要である。

悔過法要は天平年間にはすでに宮中のみならず諸寺で正月の恒例行事として行われていた。一方仏教を離れた場においても人々は新春にあたり神を迎え、その威力によって衰えた魂の復活を期した。具体的には「天下泰平・五穀豊穰・風雨順時」を求めるのであるが、このような民俗的な「農耕儀礼の春迎えの行事」が悔過法要という仏教的行事と結びついていく。

東大寺修二会の起源について『二月堂縁起』には東大寺開山良弁僧正の高弟実忠^{じゅう}和上^{わじょう}が、山城の笠置寺で兜卒天の菩薩の行法を見て生身の観音像を難波津で勧請し、一体の十一面観音像を得たことが記される。これが修二会後半の本尊「小観音」であり天平勝宝四年（七五二）、ここに十一面悔過法要が始まると伝えられる。

東大寺修二会の行事の構成は、現在では新暦三月一日から十四日（十五日未明）までの本行を中心に、その前行として別火、後行の涅槃講、観音講を伴う。本行は前半「上七日^{じょうしちじち}」・後半「下七日^{げしちじち}」に分かれ、連日の六時行法を中軸に祈願・咒禁作法を基本部として数取懺悔、走り、達陀等の付帯作法、さらに実忠忌、小観音、水取りといった別作法も行われる。そして十五日未明には結願作法を以って満行を迎える。

次に修二会に関わる人々の構成を見よう。「はじめに」で述べた通り、寺内で修二会に携わる人々は参籠衆と称される練行衆と三役⁽²⁾の外それらに配置される仲間、童子、加供奉行、大炊、院士、庄駆士から成る⁽³⁾。参籠を重ねることによって練行衆は各役を体得して法会全体を把握していく。

二、講の歴史と定義

そもそも講という語は仏教から発し仏典の講義・講説⁽⁴⁾を淵源とする。

古来より日本には仏教の教学的研鑽のため寺院に於いて仏教講究の行事が催され、盛んに經典の講演が行われた。このような講究の名称には仏典名を冠し「法華講会」「最勝講会」「仁王講会」「維摩講会」などと称せられた。九世紀以降、法華信仰の隆盛により法華八講が流行し、平安中期になると朝廷や貴族の現世利益希求から仏忌や賀算の祝宴に八講会を採用する風潮が高まった。こうした法会を「御八講」「八講」ということから「講会」を「講」と称することが一般化する。このような講は内容の俗化につれて広まり、やがて神仏習合の高まりとともに神社講を輩出した。ついで中世以降、宗教・信仰に根ざさない生産生活、金融的経済的な機能に対しても講の名称がつけられ、僧尼間の相互金融のための経済講、庶民の物資融通のための無尽講や頼母子講、職人による同業者仲間の組織である太子講といった講が誕生した。また伊勢講に代表されるような代参講も各地に生まれた。

以上を踏まえて桜井徳太郎氏は講の成立必須条件を信仰上の結合に求め、その上で講を「地域社会の各分野において互助・協力の仕組みとして考案された組織体⁽⁵⁾」と定義し「公権力や公機関とは独立した組織体であるゆえに私的人格を持ち、加入も随意で地域上の制限もなく、住民に

親近感があり共同飲食を絶対条件とする」と言及した。

東大寺において「―講」「―組」などと呼ばれる圓玄講は修二会に必要な品々や祠堂金を納め、或いは法会の警備のような奉仕という形で修二会を支える信仰上の組織であり、よって「講」に当てはまるといえる。しかし本稿でとりあげる一ノ井松明講が「講」として史料中に現れるのは明治期以降であるが、その活動形態から本稿では便宜上「一ノ井松明講」という名称を用いることにした。

第二章 中世における東大寺領としての伊賀国一ノ井と

松明調進行事

一、一ノ井松明講の概要

「一ノ井松明講」は地縁的共同体を母体として成立している講社である。その所在地赤目町一ノ井は三重県名張市の南西部、宇陀川の支流滝川左岸の平地から丘陵部にかけて位置する。本章ではまず一ノ井松明講の歴史的起源や変遷をたどる前提として、現在の松明講について確認しておきたい⁽⁶⁾。

一ノ井松明講は「二月堂講」ともいわれ修二会法会中に使われる達陀松明の檜の松明木を奉納している。その伝統としては「檜切り出し」から「松明木作製」の作業、「夜待」における次期年番を決める方法など特筆すべきものが多くある⁽⁷⁾。また法要等の中に現れる「道観長者⁽⁸⁾」の姿は行事と一ノ井の人々の信仰との関連を想起させる。

次に現在の講組織について述べておきたい。講員数は平成二十九年現在四十五軒（高齢化、独居老人家などで行事参加免除八軒）、賛助講員数十九名で、行事にはその家の男性が参加する。以前は講員資格がかな

り厳しかったが今では賛助会員も募りそれほど厳格でなく閉鎖的ではない⁽⁹⁾。しかし狭い地域の上、先祖から受け継がれた集団の結束は固い。組織の中から「役員」（講長、副講長、会計、顧問）を選出し、それ以外に「参与」という役職もある。調進行事における重要な役割を勤める「年番」「年預」職が毎年選ばれる⁽¹⁾。

講の本部は極楽寺（西境山極楽寺大徳院・名張市赤目町一ノ井）に置かれている。極楽寺は真言宗豊山派に属し、後鳥羽天皇の時代に道観長者により開創されたと伝承され、本尊の不動明王、十一面観世音（二月堂観世音）と称す⁽¹²⁾は長者の護持仏として伝えられている。極楽寺に關しては『三國地誌』に「道観長者開基にして、本尊不動は長者護持佛なりと云」とあるがその真偽は定かではない。

なお寺内には、「南都二月堂人足」（冊子）、「御師□年番帳^附」（冊子）、頂戴箱、袈裟⁽¹⁴⁾、牛玉宝印（近年のもの）、参詣出仕者署名本（卷子、近年のもの）、東大寺僧侶名（卷子、近年のもの）、風呂敷（二月堂）の染文字あり、香水入れ包み、竹製香水入れ、道観長者位牌が所蔵される。中でも「南都二月堂人足」「御師□年番帳」については近世に繋がる史料であるため第三章で後述したい。

次に松明調進講の活動を日程に沿って記す。なお本講は松明木の調進のみを行なう講であり他の活動はなく、一般の観音講のような親睦会ではない。

まず一月最終日曜日に役員が「松明山⁽¹⁵⁾」に入りこの年切り出す檜を決める。また松の倒木除去などの山道の整備を行う。二月十日、極楽寺境内に結界を張り、作業場を作る。翌十一日、松明山から檜一本を切り出し、松明木を作る松明調製の行事が行われる。松明木は檜を楔型に割り、ひもで縛って二十の「束」を作り、青竹にくくり付けたものを五荷作る。

三月十日、東大寺より僧侶を迎え、極楽寺、道観塚での法要、極楽寺における護摩法要が行われる。夕刻四時、講員は極楽寺に集合して講の会合（「夜待」と称す）を開き、「振り上げ行事」による翌年「年番」決定と飲食を伴う懇親会を開く。三月十二日、東大寺に松明木を奉納する日である。講員やその他賛助の人々が極楽寺に集合、松明木を担ぎ、徒歩で笠間峠を越える。笠間から奈良公園まではバスで移動、奈良公園から行列をなして二月堂に向かう。二月堂堂内（礼堂）に松明木を搬入し、東大寺僧侶出仕、講員参列の上法要（般若心経読誦）が行われる。その後東大寺本坊において管長の挨拶を受ける。夜、二月堂横北の参籠所の指定された講の部屋で初夜松明上堂を拝観する。また二月堂では講ごとに入場する局が決められている。東大寺は松明奉納の返礼として壇供、香水、牛玉札、南天の枝を贈る。

以上現在における一ノ井松明講の実態を述べたが、これらがどのような歴史的変遷の中でこのような形に落ち着いたのかを次節以降で検証していくことにしたい。

二、伊賀国一ノ井

一ノ井の地名は「市の井戸」の意で古代の市から起ったものだろうとする説があり、富森盛一氏は「水に関する俗地名がある如く湧水地帯であって『一ノ井』なる地名の起因は、飲料用に設けた泉水、井戸等によるものである⁽¹⁶⁾」としている。但し「矢川は十一世紀のころには黒田庄の出作がかなり進行していたが、その頃の一ノ井は未だ村が成立するほどには至らず丘陵地は原野や畠であったかのようである。それが十四世紀始め「一ノ井村」との名称が見え、この頃には既に村が成長していることが知られる」とする⁽¹⁹⁾。

一ノ井の存在する名張は、天平勝宝七年（七五五）の勅により東大寺に施入された板蠅柚に始まり、中世において黒田庄・新庄として東大寺と深い関わりを持った。そして重源が活動する場であり、また東大寺に敵対する悪党の暗躍する土地として有名な黒田庄・新庄であった。

鎌倉中期ここで活躍したのが、東大寺尊勝院に所属する華嚴僧の聖玄である。聖玄（生没年不明）の出自は不明であるが、黒田庄と本格的に関わった契機は尊勝院院主弁曉から黒田新庄預所職を譲与されたことに始まる。⁽²⁰⁾ 新庄は名張、宇陀川の東に位置し、東大寺尊勝院が領家職を有していた。さらに弁曉の死後別当に就任する延杲に黒田預所（両川西岸に所在）⁽²¹⁾ を賜り、ここに聖玄は本庄・新庄の両預所となった。その後実務的な手腕を発揮して活動は活発なものとなり、最期を迎えるにあたって東大寺に私田の寄進をした。そうした意味で聖玄は中世における一ノ井松明調進の鍵を握る人物であり、その寄進状には次のように記されている。

寄進

東大寺御領伊賀國名張郡新庄水田神社佛寺料田事

（中略）

一 二月堂

六段

二七ヶ夜行法統松二百把料田也、

（中略）

宝治三年三月 日

法眼和尚位^(聖玄)（花押）⁽²²⁾

寄進状の日付は「宝治三年三月」だが、同三年（一二四九）三月十九日の「聖玄書状」によれば、「聖玄之余命待時候耳、已一日存命之間」と自らの死が迫っていることを自覚し、そのために東大寺に対して所領の

「寄文」（寄進状）を「案内」したことを記している。⁽²³⁾ 従ってこの寄進状は三月十八日以前に書かれたことが判明する。なおここに寄進される水田はすべて名張郡黒田新庄に所在することを確認しておく。⁽²⁴⁾

「二月堂」における「二七ヶ夜行法」とは言うまでもなく修二会の行法である。「統松」（松明木の事）とのみあるが達陀用のものであり「千二百把」という数は今もほぼ変わらない。なお現在、松明寄進行事の拠点である極楽寺のそばに「松明田」（「タイマッタ」と呼ぶ）という田地があり、ここが寄進された田地と推定されている。

聖玄は東大寺修二会中に読み上げられる『上院修中過去帳』に「田園施入當院ノ前ノ院主聖玄法眼」と記され、修二会に寄与した者として今に至るまでその名を残す。「上院院主」たる聖玄は、この法会に私田を寄進しなければならぬ立場にあり、⁽²⁵⁾ 何よりも師弁曉が院主を務めた尊勝院のもとにある修二会には特別の思い入れがあったに違いない。

よって先行研究ではこの寄進状を調進行事の契機とするものが多いが、以上を踏まえ本稿では一ノ井の東大寺松明調進行事開始には以下四通りの可能性を指摘しておきたい。

- 1、聖玄の寄進（宝治三年）によって開始された。
- 2、聖玄の寄進以前に既に調進が行われて、寄進はその援助である。
- 3、聖玄の寄進以前に既に調進が行われていたが、聖玄の寄進は関わりない。

4、聖玄の寄進以後、調進が行われ始めたが寄進とは関わりない。
多くの研究論文や解説書では聖玄の寄進を以ってその開始としているが、これを明らかにする史料はない。道観長者伝説に聖玄の名前が出ること、聖玄寄進状の具体的内容や聖玄・宗性が一ノ井に深く関わることから、聖玄の寄進が松明調進と全く関係のないこととは思えない。従っ

て1または2であろう。もしも2であるとすれば、この寄進は単に好意的な援助ではなく、調進行事が「信仰から夫役への変化」すなわちここに公事が生まれた可能性も生じる。しかしこのように開始の時期を始め、動機についても村民の純粋な信仰心であったか夫役であったかなど未だ明らかではない。

さてもう一人一ノ井に関わる東大寺僧が宗性（建仁二年（一二〇二）～弘安元年（一二七八））である。宗性は十三歳にて東大寺に入寺し、道性門下として尊勝院系の塔中寺院である中院に止住し、数多くの著作を残した碩学として有名である。その宗性に対し聖玄は先師弁曉から譲り受けた「当庄（頼田庄）之預所職」を「有夜叉丸」（後の宗性）に譲与している。この時宗性はまだ入寺以前五歳であるため、これは実務の譲りではなく経済的な援助であろう。聖玄の人間関係が不明なため譲与の理由は定かではないが、宗性の器用に依るものではなく貴種という出自に譲与の動機があるのだろう。

ところで建保五年（一二一七）十六歳の宗性は名張で『断惑義章短冊雑要文抄』²⁷を抄している。その奥書に、寺内の事情により「大仏閉扉、寺僧逃散」のため「依有事縁、下向伊州名張郡」してこの地で本書を書き終えたと記す。喧騒の地を離れて聖玄との縁ある静かな名張で勉強に励んだのだろう。但しその地は「名張郡」とのみ記されるため詳細な地名は不明である。その後建保六年（一二一八）、宗性の俱舎三十講出仕に先立ち、聖玄は宗性に宛てて二通の書状を送り、細部に亘る気配りを見せている。²⁸

嘉禎二年（一二三六）、三五歳の宗性は再び名張で『因明尋思抄』を執筆しており、その奥書には、

於伊賀国名張郡矢河田中村別所薬師堂馳筆了、此書者七月二十八日

於東大寺尊勝院中門廊始書之、其後事之念忙連々懈怠、於今此田舎遂所終其功、此書感得難逢而甚後難逢、後学之輩秘藏而猶可秘藏者歟、

右筆笠置寺住侶沙門宗性

とあり、本書を東大寺尊勝院中門廊で書き始め、その後、筆の進まなかった『因明尋思抄』を名張で書き上げたという。当時宗性の執筆活動は多くが中院もしくは笠置寺でなされており、この時名張を選んだ理由は不明であるが「今此田舎に於いて遂に其功を終えるところ也」とあることから、名張という「田舎」は心静かに筆を執るに適したところだったのであろう。

寛元三年（一二四五）、宗性は四十四歳の時三度目に伊賀国を訪れ、黄瀧山如法院²⁹において『黄瀧山本堂并不動明王供養啓白』³⁰等を著している。宗性が様々な書を執筆した場所を見ると圧倒的に中院が多く、次いで最勝院であるが、晩年では知足院、最晩年では笠置寺の名が見られる。

奈良を離れると京都白川、仁和寺辺、或いは針小路・油小路・萬里小路にある宿所がそれにあてられているが、名張といった地方の場所是他には見られない。このことから名張は宗性にとって弁曉、聖玄との関わりの中でかなり特別な場所であったことが推測される。二月堂の修二会に關して宗性は何も書き残してはおらず、また何らかの行動を起こした史料は管見の限り見当たらない。しかし修二会と深く関わる尊勝院に住持した宗性はもちろん無関係ではいられなかったに違いなく、修二会の「過去帳」の中に聖玄と同様「花嚴ノ長吏當院ノ々主前ノ別當宗性前ノ權僧正」と挙げられることもそれを証明していよう。

ところで前述した宗性著『因明尋思抄』奥書により「矢河」に「別所薬師堂」があったことは判明したが場所の特定はできていない。現在矢

川地区の中に「字別所」という地名が認められる。矢川地区は一ノ井地区に隣接し、さらに松明調進の料田「松明田」に近い。横内裕人氏は別所にある中世墓の存在などから、現存する石組を寺院跡と断定できないまでも「別所薬師堂」が矢川にあったという蓋然性の高さを指摘している。また宇田川・名張川の西岸黒田本庄には莊政所に推定される無動寺があるが、聖玄の私領が矢川に多く存在していたことなどからも、矢川の別所が尊勝院による新庄経営の政治的・宗教的拠点ではなかったかと推定している。⁽³²⁾

この説に対して新井孝重氏は聖玄の経営の中心たる新莊政所は「別所薬師堂」ではなく、松明調進に直接結びついている上野屋敷に置かれたと述べている。⁽³³⁾ 上野屋敷とは一ノ井の中段段丘面上に位置する現在の上野垣内である。この付近一帯には極楽寺、松明田、道観塚といった二月堂修二会の松明調進と道観長者伝説に関わる史跡や民俗が数多く残っている。さらにここは重源布教の浄土教が深く浸透している土地であり聖玄にも関わる。⁽³⁴⁾

両氏の研究により、聖玄の新庄の活動拠点の一つが一ノ井にあることは間違いないと思われる。東大寺の新庄政所と一ノ井の関わりを示す非常に興味深い研究であり、今後の議論の進展を待ちたい。

第三章 近世における伊賀国一ノ井松明講

一、『二月堂修中日記』に記される一ノ井松明調進

『二月堂修中日記』（以下『修中日記』と表す）は享和二年（一八〇二）から文化十五年（一八一八）の間に堂童子延清の手によって記された修二会の記録である。⁽³⁵⁾ その中には一ノ井松明講に関する記述が数多く確認

される。そこで本章では『修中日記』を活用しながら現在の活動と比較しつつ、近世における当講の実態を見ることにしたい。併せて近世において一ノ井を含む名張は藤堂藩の支配下にあった。そこで東大寺莊園から藤堂藩へと支配が移る中で、松明調進行事がどのようにに継続されたのかも注目したい。

『修中日記』によれば、

朝四ツ時過伊州ヨリ松明木五荷持參之事、堂司方迄文箱奉行名宛、抽原半左右衛門殿、藤堂所左右衛門殿、此兩人之宰領ハ三隅洲太兵衛、于外ニ庄屋年寄人足・宰領共十八人也（傍線は筆者。以下同じ）

（文化十一年二月十二日条）

と、ほぼ毎年旧暦二月十二日、東大寺に「如例年伊州ヨリ松明木五荷」が到来すること、一行の到着時刻は朝四ツ時（午前十時）、四ツ時半（同十一時）または年により五ツ半（同九時）に、「宰領」が「人足」に松明木を運搬させて奉納していることがわかる。「人足」の数は年によって異なるがおよそ二十人で、松明木の量は「五荷」であり現在と変わらない。但し松明木の枚数については触れられていないが（「聖玄寄進状」では一二〇枚「続松十二百把」、現在もほぼ同数が調進されているためその前後の枚数と思われる）。

庄屋、人足が一ノ井住民であったことに関しては第三章三の(二)で掲げる史料に依り明らかである。堂司への文箱、宰領については後述したい。

また松明木の用途については次のような記事も見られ、

一、同日、処世界本明房々、伊賀之松無心ニ參ル故、壹把遣ス事

（文化四年正月晦日条）

「伊賀之松」の用途が達陀松明だけではないことがわかる。更に文化十二年二月四日条、文化十三年二月五日条により松明木が七日の「小観

音出御」の松明に「例年」使われることが明らかになる。

一、伊州ヨリ至來、松明木七日宵御輿出御之節松明之用、驅士所出之處、如例年堂童子へ驅士ヨリ断ノ後、右之松明木用申事

(文化十二年二月四日条)

一、驅士元珉兮、七日宵松明之用、伊州之松明木此方へ断ニ付、如例年遣ス也

(文化十四年二月五日条)

それ以外にも、

一、処世界公常房ヨリ、神灯松明之用伊州今來ル松明木、童子ヲ以所望ニ來ニ付、壹束遣ス事

(文化十四年二月四日条)

との記事から松明は神灯にも使われることがわかる。

なお現在においても松明木が大松明の羽根木、小観音出御御松明など達陀松明用の板木以外にも使用されることに關しては、『名張市史』にも記述がある⁽³⁶⁾。

以上のように二月堂に奉納する日程(新曆三月十二日、『修中日記』では二月)、奉納松明木の量、用途など現在も変わらない。これにより近世の松明調進が現在に継続されてきたことを確認できよう。また東大寺側から礼堂切符(次節参照)が授与されることにより、奉納後の一ノ井の人々の行動は今と同様であったことが推測できる。

二、東大寺の対応

次に松明調進に際して東大寺側が、「一ノ井」の人々にどのような対応を行なっていたのかを見ていきたい。

東大寺の返礼品については、

礼堂切手拾三枚遣ス、香水筒ハ昨年分七日ニ預リ、

(文化五年二月十二日条)

牛玉貳枚壇供壹面南天実等所望ニ付堂司江達シ申請遣ス事

(文化十一年二月十二日条)

とあるように、東大寺は一ノ井に対して「香水」、「礼堂切手」(入場券)、「壇供」(餅)、「牛玉」(札)、「南天実」を授与しているが、これらの品々は今も変わらない。返礼品授与は現在では小綱職がすべて担当するが、享和二年から文化十五年においては「堂司」が事務的な報告を受けそれを処理し俗役も特別な事柄に關しては堂司に裁量を仰ぐなど「堂司」が対外的な事柄に対する役目を果たしており多少の相違が見られる。

加えて「堂司」と「一ノ井」「宰領」の關係については、

宰領大谷浅右衛門、壇供壹面無心ニ付、堂司へ達シ遣シ申候、

(文化二年二月十二日条)

定り之外ニ牛玉貳枚并壇供四面东所望ニ付、堂司へ申入承知ニ付遣シ、

(文化五年二月十二日条)

との記述により、「宰領」が「堂司」に対して「壇供」や「牛玉」を「所望」していることが確認される。現在、このような「無心」は考えられないが、「堂司」が庶務の窓口であることは変わらない。

また奉納された松明木は乾燥のため一年間保存され翌年使われるのだが、その保存場所については文化七年二月八日条に、

昼後四職之童子ニ、在之松明木湯屋二階ニ上ケサス

とあり「松明木」を湯屋の二階に置いていることがわかるが、現在は湯屋の中の小屋に保存している。

ところで『修中日記』には他の講についての記載は見られない。もちろん個人の寄進記事は散見されるが、例えば藤蔓や柳(牛玉杖)といっ

た松明木と同様の法会必需品を奉納する講については一切書かれていない。これは一ノ井からの松明調進が他とは異なる特別な意味を持つていたことを表していると考えられよう。そして東大寺が一ノ井村を優遇していることは修二会における二月堂内の局の使用場所からも明らかである。享和三年（文化元年、一八〇四）二月十二日条には、

今晚御寺務御代参、御参籠所者、例年之通南正面局にて、御座候、走り達陀拝見者、例年之通

とあり、寺務代参が「走り」と「達陀」を「南正面の局」で拝観したと記されている。またここを休み所としても使用している。⁽³⁷⁾ 現在も十二日夜「一ノ井松明講」の局は南の出仕口脇にあるがこれは上席とされる。⁽³⁸⁾

また修二会中毎月初夜と後夜に大導師が「大導師加供帳」を奉読し、この中で「圓玄講 二月堂諸講社」として三十三の講社名が読み上げられるが、その中にはもちろん「伊賀一ノ井松明講」の名がある。さらにそれとは別に「毎年 松明ノ木 奉納セル 伊賀一ノ井松明講」と唱えられる。「一ノ井松明講」の名が二度にわたって読み上げられ、具体的な品物の名称が入るところに、この調進が東大寺側に如何に強く認識され続けているかが確認できる。

三、一ノ井松明講と藤堂藩

(一) 藤堂藩の歴史

『修中日記』の一ノ井松明調進の記事の中には「藤堂」（伊州）という語句が散見される。ここでは『修中日記』と合わせて、藤堂藩（津藩）の三大史書と呼ばれる『永保記事略』『宗国史』『庁事類編』等の記述から、藤堂藩がどのようにこの行事に関わっていたか、また松明調進行事継続の要因はどこにあるのかを考察する。

藤堂藩（津藩ともいう）は伊賀国の上野藩と伊勢国の安濃藩を合わせた藤堂氏が、津を主城の地とし伊賀上野にも城代を置いた外様の藩である。慶長十三年（一六〇八）初代藩主藤堂高虎の⁽³⁹⁾入封により成立した。元和五年（一六一九）徳川頼宣の移封に伴い山城国相楽郡・大和国添上・山辺・十市郡が伊勢国田丸領と領地替えになる。この地を「城和領」という。高虎の死後寛永十三年（一六三六）、松平貞房の転封のため藤堂藩伊予国が伊勢国に替地となったことにより、高虎養子藤堂宮内高吉は伊予から伊賀国名張に居を移しここに「名張藤堂」が成立する。

すなわち近世において一ノ井を含む名張は幕末まで一貫して藤堂藩の領する地であった。東大寺の莊園から藤堂藩の支配地への変化の中で、一ノ井松明調進はどのように続けられてきたのであろうか。

(二) 藤堂藩と一ノ井松明講の関わり

前出した藤堂藩の三大史書中に見られる一ノ井松明講の記事としては、まず山論に関する『永保記事略』元禄十二年（一六九九）正月廿七日条が挙げられる。

一、一之井村分南都二月堂行二往古今八幡山檜松明出し来候得共、

近來山論ニ而吉野ニ而買調、奉行今宰領相添、五十年來送り候之所、右山論去年内済ニ付、古來之通、八幡山ニ而伐出し候事、江戸時代、伊賀国では国境を巡る争論がしばしば発生したが、元禄年間に行われた幕府の国絵図作成事業を契機として藤堂藩はまずこの解決に取りかかった。「内済」が成立した結果八幡山争論⁽⁴⁰⁾が終結し、元禄十一年（一六九八）三月国境に杭が打たれた。

記事によれば、五十年の間、藤堂藩が一ノ井村に代わって「吉野」から檜を購入し「奉行」から「宰領」を添えて、松明木を東大寺に奉納

していたことになる。この時東大寺まで運搬していたのは一ノ井の村人であろう。また「奉行分宰領相添」とことさらに記していることから、藩が関係する「宰領」同伴がこの時期に始まったとも考えられる。

次いで調進への援助金に関する記述がみられるが、『永保記事略』享保九年（一七二四）閏四月六日条には、

一、二月堂松明代之義、勘定所用談相済候而、毎年銀六拾五匁ツ、一之井村へ被下筈相極ル、

とあり、「二月堂松明代」として毎年銀六拾五匁ツを一ノ井村に下されることを決定したことがわかる。他に関連記事が見えないため、その理由や詳細は不明である。しかし少なくともこの年の前後に飢饉等の記事が見られることを考慮すると、そうした状況の下でも「一ノ井村」に対して松明代援助の「形」を見せたことは、藩としてもこの松明調進を等閑に考えていなかったことを示しているのではないだろうか。

このように毎年調進された松明木であるが、藤堂藩に服忌者が出た場合は前もって東大寺に連絡の上、その年は調進を行わなかったことが『修中日記』の記事から知られる。

御服者ニテ松明木到来之儀、御差扣之旨去月廿五日古市役所ヨリ紙面来ル、
(文化十二年二月十二日条)

この記事より「松明木到来」を差し控える書状が城和領「古市役所」⁽⁴⁾から送られたことがわかる。その他の史料からも藤堂藩の事情により松明調進が中止されており、文化四年二月十二日条には、

一、十二日天気、例年伊州分参ル松明木之義、當年ハ伊賀太守和泉守殿御服者ニ付キニ而、持参無之事、尤去ル六日ニ堂司江磯野右金兵衛・小川五郎兵衛分右之趣断状直ニ置来之事、

とあり、これと同様の記事は文化六年二月十二日条、同十二年二月十二

日条に確認される。これらの「御服」とは『庁事類編』により文化三年八月二十六日没「高嶺公」（九代藩主藤堂高嶺）、文化五年閏六月十三日没「章善院様」、文化十一年八月十三日没「峯院殿」の逝去を指すことが明らかである。但し文化三年藩主高嶺逝去の時を除き、藩の他の行事に自粛があまり見られないことから、中止は藩内の施策というより、穢れ忌避の考えが非常に強く守られる東大寺修二会に対する配慮の表れではないだろうか。

なお調進を行わなかった翌年には前年分と合わせて松明木を二年分を奉納することが通例化しており、

一、伊州分、去卯年ハ大守御觸穢ニテ松明木至來有之、依之去年分松明木至來申候、
(文化五年二月七日条)

伊州一ノ井村庄屋、昨日之返状請取ニ参ル、依之堂司分牛玉并返状請取相渡也、香水^(之前)□□并壇供貳面所望ニ候得共、當十二日ニ相渡ス申筈ニ申、香水筒預リ置申候、
(同五年二月八日条)

今朝當年分松明木五荷、但シ貳拾束也、至來、
(中略)

壇供内貳面ハ七日ニ頼置申候事、礼堂切手拾三枚遣ス、香水筒ハ昨年分七日ニ預リ置并今日分一所ニ今晚礼堂ニ而相渡ス、

(同五年二月十二日条)
と記され、まず二月七日に前年分が納められ、重ねて十二日に今年分が届けられている。それに対して東大寺は二年分の返礼品を与えていることがわかる。また二月八日条の「伊州一ノ井庄屋」という記述から一ノ

井の庄屋が松明調進に関わっていたことが明白となる。

ところで達陀松明の作製については、

一、四日、天晴日柄宜シ敷故、達陀之松手初ス

(文化二年二月四日条)

一、三日天気、今日日柄宜敷ニ付、達陀之松手初メ之事

(文化四年二月三日条)

とあるように、ほぼ二月三日か四日に行われるため、松明木が七日奉納では間に合わない。従って調進が滞っても支障の無いよう余分の松明木が寺内に保存されていたと思われる。

ではなぜ「毎年分」として五荷の松明木を調進しなければならないのだろうか。忌の明けた翌年、短期間のうちに一ノ井と東大寺間を二往復する、或いは一度に倍量の松明木を運搬することは村民にとって大きな負担であるに違いない。それを押して行うのは達陀松明作製のための松明木そのものの必要性よりも「調進」という行為に意味があったと考えられる。その理由の一つは、一ノ井の人々にとって調進行為が伝統の上でも信仰の上でも欠くことのできない精神的なものであったためである。

一方で前述した通り、一ノ井に現残する史料に『南都二月堂人足』と『御師□年番帳』⁽⁴⁶⁾がある。『南都二月堂人足』には安永十年から平成八年まで毎年ほぼ五名の名前が列記されている。表紙に「人足」と書かれているが現在の「年番」の一覧表ではないかと思われる。また『御師□年番帳』には文化十二年から明治三十九年まで一年ごとに二名の名前が記録されている。表題の「年番」は現在の「年預」または他の役職を示すと考えられる。紙数の関係上詳しく取り上げることはできないが『修中日記』とこれらの史料との間には記録が食い違う年がある。先に述べたよ

うに、文化四年、文化六年、文化十二年は『修中日記』では松明調進が実行されていないと記されるが、『南都二月堂人足』には上記の年にも調進行事に参加した村人の名前が記されている。『修中日記』の記録の精密さから見て実際これらの年に調進はなかったと思われる。つまり実体のない行事の記録のみが史料に残ったということになる。例えば『修中日記』によると文化十三年は「松明木拾荷持参之事、此内五荷ハ去年分也」と十二、十三年の二年分を一括して調進しているにもかかわらず、『南都二月堂人足』では十二年、十三年分が別筆によって記録されており内容に齟齬が見られる。これは如何なる理由によるものであろうか。

この矛盾の解決には、一ノ井の二史料は江戸時代からのものではあるが、行事に携わった人々の名を几帳面に記録しつつ松明が調進されてきた。それはこの行事を円滑に進めていく上で必要な記録であるとともに、松明調進が一ノ井の人々にとって欠くことのできない「当然の行事」の記録であった。つまり行事が行われる(行われた)ことが重要であるため、行事が行われない年も、翌年に繰り下げて行われた調進分を同じ様に書き入れ、人足の名前を書き留めて置いた可能性があると考えられる。

ところで藩がどれほどの重きをもつて行事を促していたのか『修中日記』の中に見える藤堂藩士名の確認を行うことによって検証してみたい。

伊賀一ノ井村分例年之通り松明木来ル、宰領役大谷浅右衛門、堂司へ之文箱ノ名前磯野右金兵衛・小川五郎兵衛、松明木之人足十九人、

(文化二年二月十二日条)

朝四ツ時半、如例年伊州ヨリ松明木五荷至来ノ事、堂司へ文箱名當柚原八右左衛門・西寫八兵衛、宰領服部弥左右衛門、于外三庄屋人足共十八人

(文化八年二月十二日条)

朝四ツ時過、伊州ヨリ松明木五荷持参之事、堂司方迄文箱奉行名宛柚

原半左衛門殿・藤堂所左衛門殿、此兩人之宰領ハ三隅洲太兵衛、于外三庄屋年寄人足宰領共十八人也 (文化十一年二月十二日条)

「堂司へ文箱名當」あるいは「堂司へ之文箱ノ名前」として記される「西寫八兵衛」は津藩において後世に名を残す人物である。八兵衛は慶長元年(一五九六)に生まれ、築城の名手藤堂高虎の近習として仕え、高松藩では溜池の修築・新設、津藩においても土木工事によって飢饉からの復興を図り、慶安元年(一六四八)から延宝五年(一六七七)まで城和奉行を勤め同領の支配を担当する。西寫八兵衛はこのように多くの業績を残し、地元の人々の記憶に残る人物であるが、その活躍時期は『修中日記』の文化期(一八〇〇年代)とはかけ離れた時代であり同一の人物がいたとは考えられないため、その子孫で同名を受け継いだ人物であることも想定される。同じく「柚原半左衛門」は天明七年から八年にかけて城和奉行を勤め、「磯野右金兵衛」は公儀に関わり、江戸にも出向しているなどの記事内容から然るべき身分の人間と思われる。⁽⁴⁹⁾『藤堂藩の年々記録』(「藤堂藩重臣・功臣諸家索引」)によれば「柚原半左衛門」は六百石、「藤堂所左衛門」は高知千三百石の禄高を得ており藩中でも上級の藩士であったとみられる。

ではこの「文箱」はどのような役割を果たしていたのだろうか。「堂司へ文箱名當柚原八右左衛門・西寫八兵衛」(文化八年)「堂司へ」ということから文箱の中には一ノ井側から東大寺宛ての書状など重要なものを入れたと思われるが、その内容は不明である。文化十一年条の「堂司方迄文箱奉行名宛柚原半左衛門殿・藤堂所左右衛門殿」では名宛(受取人)が柚原半左衛門殿、藤堂所左右衛門殿となり、しかも「殿」がついていることから文箱の中身の移動が解明できていない。⁽⁵¹⁾確かに「名宛」の意味は「受取人」だがここでは差出の意ではないだろうか。また先に

述べた西寫八兵衛と考えあわせると、文箱の上書きはその年の調進に実際に携わった藩士名ではない可能性もある。

ところで毎年松明調進に同行する「宰領」としては「岩葉弥藤治」「矢那瀬長蔵」「菊水宗治」「吉川音右衛門」「服部弥左右衛門」「西岡伝五右衛門」「豊浜仙右衛門」「三隅洲太兵衛」「沖寫喜右衛門」の名が見られるが、今回検討した史料には管見の限り彼らの名前は見当たらなかった。宰領役は一年交代で行われるため、かなりの数の人間が代わる代わる行事に関わった。従って講の調進行事の「宰領」の多くは下級武士か、あるいは「伊賀国無足人」⁽⁵²⁾と呼ばれる人々が任に当たっていた可能性が考えられる。

前述した通り一ノ井村山論のあった期間、一ノ井に代わっての吉野の檜購入、および行事への金銭的援助などを考慮に入れると、調進行事は関ヶ原の戦い以後転封によって城を構え支配者となった、いわば伊賀にとつて新参者の藤堂藩が、領民に対して行った一種の懐柔的政策とも考えられるかもしれない。ところが修二会において奉読される「大導師加供帳」では「毛利家 藤堂家 水野家 片桐家 同ジク内房 大仏殿昭和 大修理浄財ノ施主等 大仏殿莊嚴具等寄進ノ施主等」とあり「藤堂家」の名がみえる。このことから東大寺にとつて、「藤堂藩(家)」は修二会を支える重要な施主として認識されてきたことがわかる。藤堂藩が松明調進以外、東大寺修二会に何らかの貢献をしていたという事実は管見の限り確認されず、毎年藤堂藩が率いるこの松明調進を、東大寺が重要視していたことがうかがわれる。それゆえに藤堂藩は、当寺との中世以来の関わりを断絶させることなく調進行事を継承していくことの使命を認識していたのではないだろうか。江戸期に農民が団体で領内を出ることを許可しているのは、やはり藩による東大寺との関係の保持、また度々出

された「定」や「法度」⁽³³⁾に見られる民心掌握の意識の表れであったと思われる。

一方で一ノ井の人々にとって、松明調進行事は藩からの夫役以上にこの地に生まれた者として自らの意志をもって、どのような状況にあらうと続けなければならなかった。こうして双方の意識が合致し、藤堂藩とともに一ノ井の人々の強い意志によって行事が継承されたものといえよう。ここに近世における調進行事継続の理由が推測される。

これまでは藤堂藩に視点を置いて江戸中期の松明調進行事を検討してきたが、東大寺側の史料からさらなる検討が必要である。また今回は限られた公開史料を用いることに止まったが、今後新しい史料からの検討を試みたい。

終わりに

本稿では、中世にその起源を確認できる一ノ井松明講が、近世、現在とどのように継承されてきたのかを追ってみた。中世に一ノ井と東大寺との関わりについては確認できたが、松明調進の実態については史料から伺うことができなかった。しかし近世になると藤堂藩が一ノ井の人々を率いて松明調進を行なう具体的な様子を見ることができた。そしてその様子や方法は驚くほど現在のそれと合致するのである。この事は近世以降途切れることなく、人々がこの行事を守り伝えてきた証しであるに違いない。

ところで本稿では詳しく触れることができなかったが、一ノ井には「道観長者伝説」が残り、今もなお人々は徳高い道観長者の遺言を守るという意識のもとに調進行事が続けている。また現地調査でたびたび聞

いた「ご先祖がしてきたことをやめられない」という祖先への思い、東大寺二月堂の観音信仰に留まらぬ広い意味での「信仰心」が人々を支えてきた。つまり繰り返しになるが、現在にも残る、松明調進行事に携わる者としてのプライド、選ばれしものとしての誇りと責務への使命感は江戸時代から引き継がれたものであろう。それらの思いが江戸時代から今に至る一ノ井松明調進のモチベーションであることは間違いない。

今年もまた一講廃講が決まりそうな状況の中、東大寺の修二会が姿を変えることなく続けられるためにも、それを支える講に関わる人々が、本稿によって自らの活動の重要性を再確認し、今後も継続していく一助になることを願っている。

註

(1) 平成二十八年現在の東大寺講台帳には四十六の講社名が記載されている。それによれば活動中の講は二十九、廃講十三、不明四と、実際活動している講は以前に比べ確実に減少しているという。しかしこの台帳には「講社名・現況・活動内容」の簡単な記述があるのみで詳細な記録が管理されているとはいえない。現在活動している講名は「台帳」に以下のように記される（東大寺狭川普文師のご教示による）。

朝参講、不動講、伊賀一ノ井講、大阪御正脉講、乙万人講、河内仲組、江州一心講、奈良百人講社、二月堂観音講、東香水講、本部講、山城松明講、樺本護摩講、岩室組、河内朝日講、河内永久社、河内永信社、河内仲組客坊（河内仲組の支部）、江州観音講、城州一心講、杉鏡講、玉川一心講、平等組、伏見戸帳講、山城八幡妙音講

(2) 堂童子、小綱、駆士を三役と呼ぶ。各々は練行衆の外縁作法、法会の会計・雑法務、湯屋の雑法務を担当する。

(3) 仲間には練行衆中の各四職（和上・大導師・咒師・堂司）に配され身辺の仕事や、加供奉行は堂司の代行諸役を務める。童子は練行衆と堂童子・小綱のそれぞれに一人ずつ配さ

れ松明に関わる仕事が必要であるが法会中の諸事一般の仕事に当たる。大炊と院士は小網に、庄駆士は駆士に配置される。

(4) 桜井徳太郎『歴史民俗学の構想』吉川弘文館、一九八九年。

(5) 平成二十八年から三十年に亘り現地調査を行った。松明切り出し行事、道観塚での法要、極楽寺大護摩法要、夜待行事、松明奉納行事等の見学取材並びに松明講師、極楽寺住職、名張市郷土資料館職員への聞き取り調査を実施した。

(6) 講師によれば「にんがととはん」「二月堂さん」の転）とも呼ばれていたという。

(7) 一本の檜から松明木五荷を作る作業は形状の上から、また運搬上の利便性から計算され尽したものである。「年番」「年預」の選出方法に関しては註(11)参照。

(8) 一ノ井においては松明講は道観長者の寄進から始まるという伝説がある。二月十一日「松明伐採表白」「祈願文」、三月十日「松明調進法要」における本堂法要「真言・宝号」や道観塚で奉読される「祭文」、御詠歌に「道観長者」という文言が現れる。また取材の中で地元の年配者の中で道観長者の名前がしばしば聞かれた。

(9) 従来からの講師は一ノ井の下垣内、上の畑、堂の前の三小場に居住する極楽寺檀家である。賛助講師はそれ以外の一ノ井住民、柏原地区極楽寺檀家である。

(10) 参与は「下垣内」「上の畑」「堂の前」から五名、この三地区以外の一ノ井賛助講師、柏原から各一名、合計七名がこれにあたる。

(11) 「年番」は「当番」とも呼ばれ本来は講師五名を選出したが二〇一七年より講師から三名、賛助講師から二名選ぶ。松明山の檜を指定の寸法に切り出して二月堂に運ぶ役目で、松明調進の実行役であり、諸行事では「年番」が最前列に位置する。年番の選出方法は「振り上げ」と呼ばれ、講師の名前を薄紙に書いて入れた茶碗を火天・水天役の講師が振り上げ、丸めた紙を一つ飛び出させる。それを繰り返して、名前の書かれた講師が翌年の年番になる。年番に当った講師の名前は毎年茶碗から抜いていき、次の振り上げでは残ったものの中から年番が選ばれる。この選出法には非常に公平性、迅速性がある。「年預」(ねんによ)は「行事を仕切る人」という意味で、現在「火天」「水天」と呼ばれる二名がこれにあたる。「振り上げ」の司会を始め、行事の際、講旗や香水壺を持つ役を務める。特に火天は三月十日には灯火用松明を持つ。また東大寺からの頂戴物を持ち帰る。年預は極楽寺を中心に反時計回りに家の並びで二軒ずつ選ばれ、これを「垣内まわり」という。但し年番役が優先される。

(12) 藤堂元甫『三國地志』大日本地誌大系刊行会、一九一六年。

(13) 早稲田大学「黒田庄現地調査概報」(一九七三年)では「御師宿・年番帳」としている。

(14) 箱書に「竹田氏寄贈講長申送事」とある。

(15) 国土地理院の地図における正式名称ではないが、近隣の人々には古来より「松明山」と呼ばれている。

(16) 富森盛一「黒田庄誌」赤目出版会、一九六八年。

(17) 矢川は名張郡の西南端に位置し、黒田本庄の宇陀川対岸にあたり、十世紀ごろから庄民の出家が盛んにおこなわれた。

(18) 「一ノ井」の文献上の初見は長承三年(一一三四)の「矢河・中村・夏見公畠取帳」(『東大院文書五ノ十四』)であるが、この時は矢川村の一部であった。

(19) 応長元年(一一三二)十二月十六日「年預五師下文」「早任下知可致沙汰事、右子細者一之井村之内上野屋敷堀事」とみえる(註(16)富森前掲書)。

(20) 「弁曉法印院務之時、為別相伝之地、讓賜聖玄法眼了畢、」(『東洋文庫所蔵塚本文書』紙背文書)。

(21) 「東大寺別当次第」(『群書類従』)

(22) 「法眼聖玄田地寄進状」(『鎌倉遺文』七〇五六)

(23) 「聖玄書状」(『鎌倉遺文』七〇五五)

(24) この時二月堂以外に東大寺の八幡宮、大仏殿、浄土堂などにも寄進が行われている。

(25) 上院とは大仏殿東の丘陵にある東大寺二月堂を含む諸堂の存在する区域で、永村眞氏によれば十四世紀初めには「華嚴宗興隆に大きく寄与した上院僧団により、二月堂修二会が勤修されたという認識」があった(『平安前期東大寺諸法会の勤修と二月堂修二会』『南都佛教』第五二號、一九八四年)。

(26) 『春華秋月抄草二十六』裏文書(『鎌倉遺文』二一六〇七)

(27) 断惑義章短冊雜要文抄 沙門釋宗性

(奥書)

建保五年九月廿八日酉時欲遂当年大師講義之問注出之、同比依講師請之訴、大仏閉扉寺僧逃散之間、聊依有事縁、下向伊州名張郡、仍於其郡抄之矣、

花嚴宗沙門宗性 生年十六 夏蘭四廻

(「宗性上人年譜」建保五年条、平岡定海『東大寺宗性上人の研究並史料』臨川書店、

一九八八年。

(28) 『俱舍論八九卷要文相』裏文書〔鎌倉遺文〕一二五三・一二五四。

(29) 『因明尋思抄』奥書 註(27) 平岡前掲書。

(30) 黄瀧山とは正しくは「黄瀧山青黄瀧寺」と称し、鎌倉時代には東大寺の末寺で、現在の延寿院の前身である。この地は一ノ井からさほど離れたところではなく、富森盛一氏は宗性が訪れた如法院は如法山(妙法山)上にあった堂のことであろうと推測している。

註(16) 富森前掲書。

(31) 註(27) 平岡前掲書。

(32) 横内裕人「東大寺二月堂修二会と黒田庄」在地に刻まれた荘園支配」〔『南都仏教』第七四・七五號、一九九七年〕。

(33) 新井孝重『東大寺領黒田荘の研究』校倉書房、二〇〇一年。

(34) 聖玄は重源の流れをくむ弁曉を師としている。先に挙げた宝治三年三月の聖玄「寄進状」にある東大寺浄土堂は鎌倉時代初期に重源によって再建されたもので、浄土堂への寄進の条には重源上人と弁曉の名がみられる。また「寄進状」の書かれた時期、重源の死後勸進聖の活動と浄土教の普及を担っていた燈油聖の活動が本庄・新庄において認められる。

(35) 『二月堂修中日記』(『東大寺二月堂修二会の研究 史料編』中央公論美術出版、一九七九年)。

(36) 「松明の用途。一ノ井が供進する松明は一年保存し、翌年使用するだが、どう使われるのか、ながいあいだ明確なことが知らされなかった。昭和四十三年一月、桐岡重一講長がこれを東大寺に質したのに対し次の回答があった。

一、三月十二日奉献の松明木は湯屋にて保管、十分乾燥して翌年度に使用。

一、三月十二日の大松明の羽根木に使用。

一、三月七日の小観音出御御松明(鑑松明)に使用。

一、三月十二日の達陀行法の打込松明に使用。行法中六度にわたる祈願文に「奉松明木伊賀一ノ井松明講」と読誦して講員一同の福寿円満を記念し奉る。」

(中貞夫『名張市史』八三七頁、名張地方史研究会、一九七四年)。

(37) 一、十二日御寺務御代参堀川隼人(中略)上堂ニテ御代参御休所南正面局走り達陀ハ礼堂正面ニテ拝見

(『修中日記』文化二年二月十二日条)

(38) 「局支配図」とは三月十二日の局の使用指定図であるが、「局支配図」の近年数年分を見ると、一ノ井松明講の局は常に南出仕口脇で、当時も変わらなかったと思われる(『東大寺小綱職堀池春彰氏のご教示による』)。

(39) 平成二十三年平岡昇修氏使用「加供帳」。

(40) 『水保記事略』とは寛永十七年(一六四〇)〜寛保二年(一七四二)の伊賀城代家老家の日録。藩政に関する法令や覚書などを編年体で整理した文献で、初期の津藩政史である(上野市古文献刊行会編纂、一九七四年)。

『宗国史』は寛延元年(一七四八)〜天明四年(一七八四)の藩政記録。伊賀城代家老藤堂高文による編集である(上野市古文献刊行会編纂、一九七九年)。

『序事類編』は宝永六年(一七〇四)〜慶応四年(一八六八)における伊賀城代家老の日録(上野市古文献刊行会編纂、一九七六年)。

(41) 弘治二年(一五五六)生〜寛永七年(一六三〇)没。

(42) 「八幡山論地」は「大和宇多郡いかみ村かつら村」と「名張郡青蓮寺村中村金河村だん村せこ口村長屋村一ノ井村柏原村長坂村ながき村かみや村布生村」の対立であった。正保三年(一六四六)、同四年再三にわたり西馬八兵衛らに訴状が出されている(『宗国史』「封疆志」)。

(43) 「伊賀御国絵図後鑑」(『伊賀市史 第二巻』伊賀市発行、二〇一六年)。

(44) 延宝五年(一六七七)古市に奉行所が設置され、それ以後加茂、古市、桜井、白石に代官所が置かれる。古市は奈良町の南に位置し交通の要所であった。

(45) 文化五年と同様に同七年も七日、十二日の二回に亘って調進しているが、同十三年は十二日に二年分を一括して調進している。

(46) 註(13) 前掲の早稲田大学「黒田庄現地調査概報」では「御師宿年番帳」としているが□の字が不鮮明で、「御師宿」または「御師留」「御師當」とも読めるが、その意味は検討を要する。

(47) 西馬八兵衛は慶安二年(一六四九)長大な雲出井(大井堰)を完成させ、関係井郷の村民が毎年御師宅で感謝の意を表し、八兵衛宮(改称後「水分神社」)を建てて八兵衛の命日を祭日とした。

(48) 『加茂町史』第二巻「藤堂藩歴代城和奉行一覧」六十頁 加茂町史編さん委員会、

一九八八年。

(49) 『序事類編』

(50) 『藤堂藩の年々記録』三重県郷土資料刊行会、一九八四年。本書は藤堂藩服部源蔵保邦（明和三年～天保七年）による『年々記録』を編集したものである。

(51) 「殿」という敬称は日記筆者の立場からの可能性も考えられる。

(52) 『宗國史』所収の「宝永年中録進将士版籍 家中役人座席之覚」には役職が書き出され、その中に「無足人頭」の項目がある。

属伊州主城管下、農兵也、五員、俗謂無俸禄而供公用、為無足、村里有名之家、報官、自製一副甲冑、一根長槍、則許下帶兩口刀、別衆戸、呼之曰無足人、

無足人は高虎の越前戒厳終了後伊賀藩に命じて設置された農兵制度である。彼らは農兵であり平時は農事に従い、配下の者を抱えて時に応じて武力となる。「數廻無足人分布表」（久保文武『伊賀無足人の研究』、一九九八年所収）によれば黒田には近隣の地区よりも格段に無足人が多い。無足人は姓を持ち帯刀を許されるなど一般の農民とは異なる。よって『修中日記』の宰領役を担う可能性が考えられる。

(53) 「法度二一條」（慶長十三年、一六〇八）、「定条々一三か條」（慶長十四年、一六〇九）、「百姓成立仕置令」（延宝五年、一六七七）、「定」（延宝九年、一六八一）等。

〔付記〕

本稿を執筆するにあたり貴重な史料をご教示頂いた東大寺管長狭川普文師、前上院院主平岡昇修師、東大寺三役堀池春彰氏、また現地取材にご助力を頂いた一ノ井松明講議長清水重達氏他松明講議員の皆様、極楽寺前住職泉孝明師、現住職中川拓真師そして名張市役所の山口浩司氏に心からの感謝を申し上げます。

Todayji Nigatsudo Shunie and Kosha

— with the focus on Ichinoitaimatsu-ko —

AEBA Sanae

[Abstract] In Nigatsudo at Todayji Temple “Shunie” is practiced from the first to the fourteenth of March every year. This event has been continuing since A.D. 752 without fail, and the leaders are the monks called “Rengyoshu.” Assistants who are not in the leadership roles also work together in order to take care of various matters during the event. On the other hand, people in the secular world also have their roles in it. They organize a “ko” called “Engen-ko,” and support “Shunie” by being in charge of contributing donations and security service during the event.

In the present paper, the author discusses how the event of “Taimatsuchoshin” has been practiced, focusing on “Ichinoitaimatsu-ko,” which is one of the sub-ko’s of “Engen-ko,” in Iga Province.

The reason why Ichinoi had some relationship with Todayji Temple was perhaps because their land was a part of the Todayji Temple estate. This is proven by “*Hogen Shogen Denchi-kishinjo*” (A.D.1249), a letter of donation of the rice field by Hogen Shogen, a priest in Todayji Temple. However, we can not conclude that was the beginning of this event just from that particular record. This Ichinoitaimatsu offering was not confirmed in the historical record at all until after Muromachi period, but we can witness it again in “*Nigatsudo Shuchu Nikki*,” which was written in the middle of the Edo Period. When we compare the article in that diary and the record of current activities, the content of the donation is the same. Also, in “*Nikki*,” the word “*Todo*” appears from time to time. That means *Todo-han* to which Ichinoi belonged had some role in the

donation. Therefore, the sense of duty of the *Todo-han* to maintain an uninterrupted relationship with Todaiji Temple since medieval times and the strong will of the native Ichinoi villagers seem to be the reason why this practice has succeeded until today.

Since many kos like this are disappearing these days, the author is hoping that this research will contribute to the reaffirmation of the identity of “Ichinoitainatsu-ko.”

A word on the use of the word “ko”. It does not appear in historical records before Edo Period, but the word “ko” is used here because what they did then is the same as what “ko” does now as an association.

[Key Words] Todaiji Temple Nigatsudo Shunie, Engen-ko, Ichinoitainatsu-ko, Nigatsudo Shuchu Nikki, *Todo-han*